

肩肘を張らない、緩やかな域学連携（福岡県八女市）

荒川，真美
八女市新社会推進部商工観光課

吉松，慶子
八女市茶のくに観光案内所：観光コーディネーター

徳永，翔太
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士課程

土中，哲秀
九州大学大学院経済学府：博士課程

他

<https://doi.org/10.15017/1917861>

出版情報：決断科学. 5, pp.102-133, 2018-03-30. Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

座談会 4

肩肘を張らない、緩やかな域学連携 (福岡県八女市)

荒川真美

吉松慶子

八女市新社会推進部商工観光課

八女市茶のくに観光案内所コーディネーター

徳永翔太、土中哲秀、紺屋美里、花松泰倫

司会

福岡県八女市は、九州大学決断科学大学院プログラム統治モジュールが、本プログラム開始当初より、学生実習の現場として度々訪問する最重要フィールドのひとつである。統治モジュールの活動以外にも、学生による自主的研究の調査地、さらには入学直後の学生を対象とするオリエンテーション合宿地となるなど、多くの学習機会を頂いている。他の自治体と異なり、連携協定締結などの組織的な関係はないにも関わらず、本プログラムの野外活動の中では、おそらく最も頻繁に学生が訪問する自治体である。

統治モジュールでは、「持続可能な地域コミュニティはいかにあるべきか」を調査研究テーマに掲げている。人口減少や少子高齢化に対処する日本と韓国の中山間地域、漁村などを訪問しながら、実態調査、さらには、地域の持続可能性を高めるための提言や問題解決の実践にまで踏み込んで、研究活動を行っている。このような実践的活動のフィールドとして、我々が多いときで月に数回の頻度で八女市

を訪問してきた。福岡市内から車で1時間足らずで行き来が出来ることもあり、文字通り「足繁く通う」ことが可能な地域なのである。学生にとっては、頻繁に通うことで地域の実情とその変化に直に触れながら、机上の空論に陥らない現実的な問題把握と解決実践を目指すための絶好のフィールドとなっている。

八女市は、平成22年の大合併により、人口6万5千人、面積は福岡県内で北九州市（人口はおよそ95万人）に次ぐひとつの巨大な自治体となった。他方で、編入された上陽町、黒木町、立花町、星野村、矢部村でも今なお、独自の歴史と文化、人々の生活が色濃く残る。特に、平野部で市の中心地となった福島地区と、その他の中山間地域では、まったく異なる風景や人々の暮らしに出会うことになる。「地域コミュニティ」を調査対象とする我々にとって、八女市内各地での実習経験は、自治体をひとつのユニットとして捉えることの難しさを教えてくれる。また、八女系に代表される農業や、仏壇、提灯、和紙といった伝統工芸、かつての城下町、商家町を偲ばせる伝統的建築物や町並みを保存する活動が盛んであり、まちづくりの学習にとつて多様な材料を提供してくれる地域でもある。さらに、合併によって生まれた広大な空間とその中に息づく多様な文化、人々の生業を活かし、観光を通じて市民を元気づける先進的な取り組みも、近年注目を集めている。

これまで、本プログラムの多くの学生が、八女市で様々な調査研究を行ってきた。地域おこし協力隊の役割、交通弱者への対応、伝統工芸産業の活性化、体験型観光、過疎地における高齢者・児童福祉政策など、テーマは多岐に渡る。本座談会に登場する徳永翔太は学校教育による地域課題解決の可能性を、また土中哲秀は寺院と地域コミュニティの関係について、それぞれ探ってきた。そして、これらの研究成果を市民向けに発表する活動報告会を、毎年3月に八女市内で開催してきた。

こうした一連の実習活動を全面的に支えて下さったのが、八女市の荒川真美氏と吉松慶子氏である。本座談会でも触れるように、我々の出会いはまったくの偶然であった。しかし、この「偶然」こそが、大学と地域が協働する域学連携のあるべき姿を示唆するキーワードともなっている。荒川氏が提唱する「ゆるっと」した域学連携とはどのようなものなのか。なぜそうあるべきなのか。学生2名と教員を交えた会話の中から見えてくる域学連携のひとつの形をお楽しみ頂ければ幸いである。

花松泰倫



花松泰倫 はなまつ やすのり

持続可能な社会のための決断科学センター講師・
統治モジュール
専門：国境学

花松 簡単に、今回の企画の説明をさせていただきます。近年、域学連携という、大学と地域が連携する取り組みが全国各地で出てきました。九大決断科学センターもこの3年間の取り組みの中で、八女市だけではなくて、対馬、長崎、日南、由布、佐伯などで、学生実習でお世話になっていきます。中には連携協定を結んでやらせていただいているところもあります。そこで、地域と大学がお付き合いするところはどういうことか、どういった付き合い方がお互いにとっていいのだろうかというテー

マで、本にまとめようということになったんです。

統治モジュールでは、八女市のほうですとお世話になっていて、特に商工観光課の荒川さんと吉松さんには初期の頃から本当に大変お世話になっておりますので、ぜひお二人と、学生二人、それから、連携研究員(当時)の紺屋さんで、お話をさせていただこうかなと思います。

八女での活動開始の経緯

花松 最初に荒川さんと吉松さんにお会いしたのが3年前で、忘れていても多いので、話しながら思い出そうかなと思います。経緯として、我々統治モジュールが八女で学生実習をすることに決めたのは、実は私でもないし、学生でもないんです。統治モジュールリーダーである出水薫先生が、八女福島の町並み保存活動で北島力さん(まちづくりネット八女代表、元八女市職員)とおつき合いがあった関係で、出水先生から八女で実習をしたらどうかと言われたのがきっかけです。

ただ、私も含めて教員全員がまったく八女に土地勘も



荒川真美 あらかわ まみ

八女市新社会推進部商工観光課

ないし、それまで行ったこともなかった。本当にどうしたらいいんだろうと（笑）。とはいえ、何かやらなきゃいけないから、とりあえず我々だけで行ってみようというので、教員3人で八女に下見に来て、初めて訪ねたのが、この観光案内所なんですよ。

荒川 そうですよ、一番初めがここですよ。アポもなくいきなり来られましたもんね。

花松 まずは観光案内所で情報収集だということ、普通の観光客の感じで来ましたね（笑）。

荒川 そして、たまたま私がいたんだよね。

花松 そうなんですよ。

荒川 それはキーポイント（笑）。

花松 私は、最初にお会いしたのが荒川さんだったことがそれ以降の活動の決め手だったような気がするんですけど。ほかのところだったら、多分今のようなお付き合いの流れにはならなかっただろうな。もちろんその当時は、荒川さんがどういう方かを全く知らずにお話をさせていただいたんですけども、お話を重ねるにつれて、八女の本当のキーパーソン中のキーパーソンだなと気づきました。

荒川 キーパーソンというか、人をたくさん知ってただけですよ。

花松 でも、それがすごく大きなファクターになって、学生に多くの方をご紹介いただきました。荒川さんで本当によかったなと思ってるんです。

八女市の現状と課題

花松 地域と大学がどう関わるか、という話に進む前に、八女市の現状あるいは課題、それから八女市が今進めているまちづくりの施策などについて、ごく簡単にご紹介いただけたらと思います。我々はまちづくりの勉強でこちらに來させていただいています。そういつたこちら側のニーズと、八女市が今抱えている課題がうまくマッチングできているのだろうかということが、後で議論されると思いますので。

荒川 最初に來られたのがちょうど平成26年で、うちの市町村合併が平成22年ですから、合併して間もないころに來ていただいたんです。合併は1市3町2村と広域だったので、多くの方がごく不安を持ちながら合併に入りました。吸収合併で、小さな村や町が大きな八女市の中に入らんといかんというのがあったんですね。田舎に住む人たちにとっては、このままじゃだんだん衰退するだろうな、人口も減るだろうなという心配がいっぱいある中での合併でしたからね。

そうした中で、中心地から離れた田舎で今から何を頑張って盛り上げていくかというところ、やっぱり観光で人を回すしかない。八女はいろいろな観光施設が点在しているんです。そこを線で結んだり、面にしていくことがとても大事で、そういうのをやっていかないといけない。実は、これのやり始めぐらいのときに來てもらったんです。

花松 それまでの観光事業は旧市町村でばらばらでやっていたんですか。

荒川 それまではばらばらで、合併する前は、おらが村大將じゃないんですけれども、各地でよく頑張っていました。例えば星野村だったら温泉施設、星が見られる施設というように、いろいろな施設を立ち上げて、観光客を都会から呼ぶ努力をどこの町村もばらばらに連携を持たずにやっていたんです。矢部村は矢部村で俺んとこ來てくれ、星野村は星野村で俺んとこに、という感じだった。でも合併したらそんなこと言ってもらえない。これからは矢部も星野も上陽も、どこでも一緒になってお客さんを呼びましょうという企画を立てないといけないんで

すよ。それがうちの観光政策の一番の目的で、実はこのころに初めて「茶のくに八女・奥八女」というキャッチフレーズも作っているんです。

花松 それままでばらばらだった地域を、観光を軸にしてまとめる作業ですね。

荒川 ちょうど決断科学の学生さんが来られた時期というのが、例えば合併に伴う補助事業で観光バス運行の実証実験を始めたたり、着地型観光プログラムを手がけたりし始めたころなんです。ですので、まちづくりの課題として、今からお客さんを市内全域に呼ぶために何をしたらいいのだろうと考えていたちょうどいいタイミングで来てもらっていました。

花松 「これからこんなこともしてみようよ！」という勢いを強く感じたのをよく覚えています。合併後の市民の一体感を観光を通じて共有していくという試みは、学生にとっても勉強になったようですよ。

荒川 地域の課題としては、とにかくやっぱり、合併に伴って人口が減る中で、どうやって生き残っていくかというのがあります。人口の減少は、もう仕方がない。

日本中、仕方がない。福岡市内以外ね（笑）。だったら、ここに住んでいる人が、どう楽しむかが大事。私たちの仕事は観光の事業だけど、例えばこれが福祉の担当者であれば、いかに住みよくしていくかとか、デマンド交通の担当者なら、いかに高齢者が買物に行けるようになるかとか、そういうことを市全体で考えていかないといけないというのが、今の八女市の課題です。

地域から見た大学との付き合い方

荒川 来て頂いて何がよかったかというと、住んでいる人じゃなくて、ヨソモノ、特に学生さんたちが外からの目でどういうふうに見えていただけなのかなというのに、私はとても興味がありました。何をやるんだろう、どういう提言をしてくれるんだろうと。期待半分で（笑）。

花松 すみません、何も提言できていませんが・・・
荒川 いやいや、別にそこで何かレポートをつくったり、どーんと企画を出すことを期待してたわけじゃない



徳永翔太 とくなが しょうた

決断科学大学院プログラム
統治モジュール所属
地球社会統合科学府博士課程3年
専門：政治学

んですよ。

徳永 最初は、あそこが楽しかったんです、とか、素直な感想でしたね。

荒川 そう、それでいいの。あそこに行ってみてどうだった？とか。

花松 特に最初のころは、みんな八女のがよく分からなかったの、観光客気分楽しんでいましたよね。荒川 うちとしてはそれでいいんですよ。あるとき、いろいろな地域を回られた学生さんにどうだったと聞い

たら、こんなのがまだ残っているというのにとっても興味が湧いたというのを話してくれて。吉松さんが企画を作るときに、なるほど、そういう目で見てくれる人もいるんだなという勉強にもなりました。

もう一つは、九大に使われてばかりではもったいないので(笑)、今度は反対にこっちもお願いしよう。『バスツアーをやらうと思うけれども、どういうのがいい?』という提案を決断科学の学生さんにしたのが、一昨年でしたね。

徳永 当時育休中だった博士課程の古橋寛子さん(統治モジュール卒・現在、九州大病院口腔画像診断科医員)が子持ちのママさんでも楽しめるツアーを考えて、採用して頂きましたよね。

荒川 そうだったね。あれは好評で、随分宣伝させてもらってます(笑)。そしたら、あの企画も含めて、うちの観光の取り組みが農水省から賞を頂きました。

吉松 農水省の「ディスプレイ農山漁村の宝」という賞です。

花松 それはすごいですね。おめでとございます！



土中哲秀 はなか てっしゅう

決断科学大学院プログラム
統治モジュール所属
経済学府博士課程3年
専門：計算科学

荒川 だからやっぱり、こちらが受け入れて、がーんと構えてしまうと、お互い固くなるので、普通に話しながら、「どう思う？」とか、そういうのが大事かなと。行政側の私たちにとっても、会議室のなかで「まあの課題は何ですか」「それに対する打開策を学生のみなさんはどう考えますか？」という形よりも、実際に地域を回って見てもらって、感じたことを素直に言ってもらえたのは、このおつき合いの中でとてもよかったです。私はやっぱり、いいタイミングでお会いできたかなと。

花松 そう言っていただけでも本当に助かります。

荒川 実はそのころは産学官連携に関連した国からの補助金が多かった時期で、皆さんに会う前に、ほかの大学とコラボレーションして学生さんと携帯アプリの開発をやったことがあるんです。でも、それは結局うまくいきませんでした。

花松 どうしてですか。

荒川 学生は、現場を少しは見えていたんですけども、結局、紙の上で設計をつくるんです。でも実際に行ってみたら、Googleマップと違うとか。

土中 お店があるかと思ったら、潰れていたりとか。

荒川 それもあつたね。もうひとつは、八女の石橋を巡るアプリをつくるというんです。立派な企画をして、すごいプログラムを組んでくれて、うちで発表もしてくれたんですけども、実際に使ってみようとしたら・・・橋って長いでしょ？幅もあるから、どこにポイントを立てるかで変わってしまう。それから一番ネックだったのが、そのポイントに行かないとアプリが起動しないとい

うこと。それで、どこで起動させるんだとか、改良しようとして頑張ってくれたけど、結局うまくそこまではいかなかったですね。彼らは将来的にそういうことをやろうという学生たちばかりだったので、設計をするのは得意だったかもしれないけれども、実際に現場に向いて橋の長さとか距離とかを調べずに、GPSの点を置くんですよ。

土中 位置情報ですね。

荒川 置くのはいいいけれども、ここにGPSの点を置いているから観光客はそこまで行くかというと、車窓から見る人が多くて。

花松 なるほど。

荒川 現状と合っていないかった。

土中 確かに橋を見るのに、橋の上に立つ人はいないですよ。(笑)。

荒川 そうだよ。その学生さんたちも、そういうことがとても勉強になったと言っていました。

土中 結局システム化する部分よりも、情報をどう調べて、どう取り出すかのほうが難しいんです。



吉松慶子 よしまつ けいこ

八女市茶のくに観光案内所
観光コーディネーター

荒川 そうそう。だから、QRコードで取れるかたちで施設やスポットの説明情報も作ってはくれたんですけども、お客さんはまずQRコードを探すことから始まりますよね。その探した人が、限られた時間でそのQRコードを使って説明を取るかということ、とらないですよね。でも一生懸命作ってくれたので、2年間ぐらい一緒にやってもらいました。

吉松 東京の学生さんも来ましたよね。

荒川 そうだったね。あの子たちはFM八女の番組で、

サイバー鬼ごっこという企画をして、携帯で写真を撮って、ここを見つけたらワンポイント獲得というような企画画をした。けれども、まだWiFiも上手に通っていないので、それも結局失敗なんですよ。ただ、私としては、そういうので成功して事業にするというよりも、そうやって学生さんが関わってくれることのほうがよかった。今でも来ますよ。就職してるのに。去年も来たね。

吉松 東京の大手企業に就職した子たちですよね。

荒川 そう、二人で、女性として相談したいとか言つて（笑）。まあ、あれはただ飲みに来ただけだと思っただけ。でも、学生さんのためには何かいいことになっているのかなど。ただ問題は、それにつき合う人ですよ。地域のなかで誰がつき合うのか。それに依るような気がします。

花松 われわれは荒川さんでよかったです。

荒川 ちょっと話がずれるけれども、吉松さんがやっている着地型体験観光プログラムは、言い方は悪いけれども、地域社会に根差した生活を商品として販売すると

いう今までにない新しいつくり方なんです。これはすでにヨソに負けないくらいのもがあるけど、まだまだやれることがある。例えば、体験プログラムを提供されている方々にはそれぞれ歴史があるから、今度はそれを取材して掘り下げていこうとか。

吉松 伝統工芸の職人の方々が全体的に歳が上がつてこられて、技術の伝承が難しくなっているんですよ。

荒川 だから、学生さんがめざす課題を解決していったり、地域で研究するのも一つだと思っんですけれども、反対に、現実に地域にある課題を見つけて、それをどうするんだというやり方が入っていかれるのもありかなと思います。それぞれ学生さんには自分のテーマや課題があるとは思いますが、じゃあ、このまちにはどんな問題があるのだろうというアプローチもあっていいかなと。

徳永 アカデミズムの世界の人たちは、やっぱり自分の目的で入っちゃうところがあるんですよ。

荒川 そこだと思っんですよね。だから、気持ちとしてはどんなテーマでもいつでも来てもらいたいのですけ

ど、絶対にこの学生は市のために何かやってってくれると思っただけの時間も限られてますし、疲れてしまうこともあるのです。

花松 それはおっしゃるとおりで、我々も意識しているところですよ。

荒川 だからこそ、例えば、その日だったら私もちょっと空いているから会おうよ、ちょっと学生の意見を聞こうよ、じゃあツアーしちやおうよとか、気楽な形がいいんです。そうすれば、学生さんとしても、私があのお願したあれが実際にこんな事業になるんだというので成果になる。また私たちも、子育てママ応援ツアーは実は九大の学生さんが考えたんですよということで、それもまた一つの成果になっていくんです。

吉松 学生さんに言っただけの一言が、私たちの仕事に活かされることが本当に多いんですよ。視野が広がるというか。

学生が地域から学ぶものは

花松 でも、他大学の学生さんの話を聞いて改めて思うんですが、何回来たって、ヨソモノはヨソモノですから、地域のことですぐにわかるもんじゃないということ、我々は前提にしなければいけないと思うんです。何回か来て、わかったつもりになって何かをつくり上げたって、どうせうまくいくはずがない。学生にも安易に答えを出すなど言っています。とにかく、何回も通って迷えと。

ただ一方で、暫定的な結果でもいいから、何らかの形で成果を出して、お世話になってる地域のみなさんに恩返しをしなければいけないという思いもあります。それに応えきれないというジレンマを抱えながらずっとやっています。

荒川 そんな恩返しとか考えたらダメよ。結果のことなんか考えず地域に入っただけで全然いいと思う。多分、地域のおじちゃん、おばちゃんたちも、若い人と話すだけでうれしいと思うし。

花松 確かに、そうおっしゃる方は、田舎にはすごく多いですよ。

荒川 案外、人見知りが多いよね、田舎は。

吉松 何回か顔を出していて、やっと心を開いてくださる方もいます。

花松 学生の二人は、3年間八女に入ってみて、どう思いましたか？

土中 やっぱり視野が広がったというのがすごくあります。僕の専門分野は理論研究で、数式をがりがりとやるだけです。一方で、実家が田舎のお寺なんです。八女に来る前はお寺である実家があり好きじゃなくて、田舎にいいイメージがなかった。でも、八女に来てから、田舎がいいなど再認識するところが結構ありました。特に、都会だと何でも揃うけれども、田舎のゆっくり流れる時間が好きだとか、八女茶うまいとか。そういうところで人口減少がどんどん進んでいくのは寂しいなど思ったり。そして、いずれ自分が帰るかもしれない田舎で、どうすればいいのかということを考えられるようになります。今までスルーしていたので。

荒川 ちよつと聞いていい？お寺を継ぐの？

土中 いきなり核心部分ですか（笑）。

荒川 どうなんだろうと思つて。

土中 とりあえず、住職になるための資格をとったり、今できる最低限のことはやっています。

荒川 ということは、やっぱり跡を継ぐんだね。

土中 継ぐかもしれないですが、まだよくわからないです。

荒川 やっぱりお寺の息子さんだね。本当はもつと自分のやりたいことがあつて、ほかの勉強をしているのかもしれないけど、でも実家のお寺は昔から続いているのよね。

土中 そうですね、300年は続いているので。

荒川 そこを僕の代で止めていいんだろうかっていうのもあるよね。

土中 そうです。結局はそこです。愛着心というか。多分、地元に対してもそうだと思うんですけども、僕はそれが強いかもしれないです。

荒川 土中くんがヒアリングに行った明永寺の住職さ



座談会「肩肘を張らない、緩やかな域学連携」



んも、そうやっていろいろ考えながら、お寺で音楽活動をやってみたりしてるものね。

土中 多分、あの方もそうですね。そんな感じがします。

荒川 学生だから勉強して研究者にならないといけな
いという人もいるかもしれないけど、土中くんみたいに、
勉強だけじゃなくて視野を広げるために、こうやって地
域に入るとするのがとてもいいと思う。多分、お寺を継
いだら、いい住職さんになれるね(笑)。

吉松 後で法話をされるときに、いろいろありがたい
話ができそう。

荒川 もしかししたら、着地型の体験プログラムをお寺
でやってるかもしれない(笑)。

土中 もし継ぐとしたら、そういう方向になるんじや
ないかと、勝手に思っていますね。

荒川 人の集うお寺を目指したいと言ってたものね。
土中 それがお寺の根本概念ですから。もともと人の

集まるところだったんです。

花松 地域コミュニティを維持する上で、お寺という



霊巖寺の住職から話を聞く土中

撮影 花松 泰倫

場が重要な役割を果たすということは、当たり前といえ
ば当たり前だけれども、改めて注目され始めています。
おそらくこれからそうなっていくんじゃないかな。

土中 そうですね。宗教観が薄れて住みにくい世界に
どんどんなっていくなかで、人々の拠り所としてお寺が
求められてくるんじゃないかと、個人的には予想してい
ます。

花松 その意味で、八女での実習が勉強になった部分
もある？

土中 もうかなり。特に明永寺と靈巖寺ですね。お寺
で演奏会をされてたり、体験観光プログラムをされてい
たり、まちづくりとうまくマッチしてやられています。そ
ういった活動を通して、もともとまちづくりの中心に
あったお寺が、今もう一度、現代的なまちづくりに関わっ
ている姿を目の当たりにして、個人的にはとても勉強に
なりました。

荒川 どうだったんだろうと思ってたけど、それはよ
かったね。

土中 とてもよかったです。親や周りにも、考

えが変わったね、と。京都で受けたお寺の講義でも、地
域のお寺の重要性がかなり話題になっていて、やっぱり
間違つてなかったんだなと感じました。

荒川 ということは、やっぱり学生さんのためになっ
たんだね。

花松 学生には本当にいい勉強になっているんです
よ。

大学や学生が地域に与える影響とは

荒川 でも、徳永くんのほうは反対に、高校生がすご
く勉強になったと思う。

徳永 ほんとうですか。そうであれば嬉しいです。

花松 私立八女学院高校の生徒さんと一緒に、八女福
島の街歩きフィールドワークと発表会をさせていただき
ましたよね。徳永くんが授業を取り仕切って。

荒川 授業の最後に徳永くんが話してた、「地域には
いろいろな人がいて面白いでしょ？」という話、高校生
にすごく響いたそうだよ。担任の先生も、現場や外に出

る機会がないので、うまく生徒を連れ出して、いろいろなどころを回らせてくれてよかったですと言っていました。

徳永 自分も楽しかったです。地元の高校生がいるから本音で語ってくださる訪問先の方もいたりして。また、八女に3年間通って、福島の町並み保存地区は知っていたつもりだったんですけども、土橋市場の存在を全然知らなくて、勉強になりました。

荒川 土橋市場が一番喜んでたよね。

徳永 テンション上がりました(笑)。すごく楽しくて。高校生たちも、八女は寂れてるかと思っただけど、全然イケてるじゃん、と。

荒川 そうそう。「何これ、めっちゃいい。チョーかわいい!」とか。

徳永 地元を知らない若者がほんとうに多いなというのを、そのとき実感しました。

荒川 まちづくりを頑張っている地元の人のところ、大学生と一緒に地元の高校生が行くという流れをつくったら、その高校生がもしかしたら大学に行って、また地域づくりをやるかもしれないし。

徳永 そうですね。高校生のアンケートの自由感想欄で、「海外でNPOをやりたいと思っただけで、自分の地元をよくする活動を仕事にするのもいいなと思いました」という感想があつて、うれしかったですね。

荒川 それは間違いなく、高校生の刺激になつてると思うよ。

徳永 まずは地元でこういう活動や課題があるんだなというのを知ることが、地域の子供たちには大事なのかなと思つてます。

荒川 その「知る」ということをお手伝いしてくれたんだから、まさしく「地域への恩返し」になつていると思うよ。

花松 高校からは、また来年度もぜひお願いしたいと言つていただいています。

荒川 そういう流れができると、大学と地域のつながりも持てるし、田舎の学校なので生徒もとてもいい勉強になる。高校も喜ぶでしょう。

吉松 発表会、すごかったですよね。おもしろかったです。



矢部屋許斐本家で話を聞く八女学院高生

撮影 紺屋 美里

荒川 レベル高かったよね。いつの間にこんなに賢くなったのか、と(笑)。

大学と地域を「つなぐ」人

徳永 でも、一番苦労したのは、どこにヒアリングに行けばいいのかを決めてアプローチすることでした。ちゃんとお話していただけるのか、人間関係はどうなのかとか、ヨソモノだとやっぱりわからないんです。地元の人がコーディネートしてくれないと、あの授業はできなかつた。荒川さんにはすごく助けていただきました。

荒川 地域に入るときには、人を知っている誰かが必要よね。あの時は、徳永くんが上手に私を使ってくれました。

徳永 域学連携って補助金の事業というイメージが強いんですが、お金ではなく、やっぱり人と人をつなぐことが鍵だと思います。大学が地域に入るうとしても、ヨソモノなのでよくわからないことがある。やっぱり、うまくつないでほしいというところがあります。



もてなし人 108名の似顔絵で作った
「茶のくに八女・奥八女」ポスター（後方）

花松 我々がもうひとつの実習フィールドにしている対馬では、地域おこし協力隊や集落支援員の方がコーディネートをして下さってます。一時的でもそこに住んでいる、でも、その地の人ではなくて本来ヨソモノなので、上手く地域のしがらみを抜けながら関係を築いて、地域と外部の橋渡しができる立場にある方々です。そういった人たちの存在が、地域と大学が関わる時の大きなポイントになると思います。八女でもそういった方々ともう少しお付き合いさせていただければ、また広がりもできるのかなど。

荒川 多分、どちらかというところ吉松さんのほうがそれに近いかな。私は地元民だし、どこに行っても知り合いばかりで、悪いことができない（笑）。

花松 吉松さんはもともとヨソから来られたんですよね。

吉松 観光案内所がここにオープンするときに、コーディネートが一人必要ということで、久留米のほうからご紹介いただいてやって来ました。

荒川 学生さんとも近いかも。彼女は久留米からいき

なりこつちに入ってきて、地域の人と初めて触れ合うということをお願い体験しています。相当苦労や努力もしててでしょう。だから、学生さんに一番助言してくれるのは吉松さんだと私は思う。

徳永 地域の人ということで八女がおもしろいと思うのは、ハコモノよりは人に注目するアプローチが強いように感じる点です。そのポスターにある「もてなし人はすごくおもしろいですし。」

吉松 八女のキーパーソン108人の顔を集めた、このポスターですね。

荒川 これはもともと、合併前にコンサルと一緒に作った八女の人材バンクを元にして作りました。合併を見据えて、どこの地域にどういう人がいるかを全部吸い上げて、データを作った。でもうまく活用されてなかったんです。

吉松 私がこちらに来て、バスツアー企画や着地型観光プログラムを考えると、この人材バンクのデータがどんと残っていて、まずはこれを読んで一人ずつ会っていいこうと思ったんです。とりあえずご挨拶して、聞き

取り調査をして、赤丸をつけて、そこから一番初めのプログラムを作っていきました。

荒川 だから、彼女もこれを使ったということですよ。全部と一緒に回ったよね。

吉松 来たときは誰も知らなかったから。

荒川 そう、学生さんと同じ立場よね。彼女も全部、そういうのを上手に使いながら通って、仕事をさせてます。この人材バンクもわかりで、とてもいいのに使っていないもの、誰も注目していないものがある。でも、ちよつと注目させると、ドーンとテレビに出ちゃう。ハコモノ建てるより、やっぱり人やね。

徳永 都会だったらハコモノでいいと思うんですけども、こういう田舎では人との会話の中から楽しみ方が生まれて来ますもんね。

花松 吉松さんは久留米でどんなことをされていたんですか？

吉松 地域のコミュニティ紙でライターをしています。

荒川 履歴書を見たとき、びつくりしました。あまり

にもいつばい資格を持っていて、こんな方がうちに来ていただけなのかと。趣味がカメラだったり、いつの間にか、山登りが好きになって。

花松 最初からじゃないんですか？

吉松 違うんですよ。八女に山がすごくたくさんあって、山のプログラムを企画する上で、事務局が登れなかったら格好悪いよねと、いうことで登り始めたら、これはおもしろいなと思って、虜になりました(笑)。

花松 そういう立場から見ると、今まで3年間おつき合いさせていただいて、率直にどういうふうにお感じになりますか？

吉松 やっぱり新鮮な視点で、研究の話とか、一生懸命プレゼンのための資料をつくって発表してくださるので、とても私たちも勉強になった、学びになったというのがあります。プログラムのアイデアになったりするんです。例えば、決断科学の須藤竜之介くん。彼から九大の「狩り部」の話聞いて、ジビエ料理のプログラムを作るときに狩り部の部長さんにアポをとってみたいとか。そういうふうに、観光プログラムの深まりや学びに

なっています。

荒川 狩り部の学生はすごかったね。これも彼女の企画のきつかけになったんですよ。狩り部という名前がおもしろかった。「海賊かい！」って突っ込んだもんね。違うカリブだった。こういう企画は、ちよつとしたアイデアだもんね。

吉松 そうですね。だからやっぱり、雑談の中から生まれるんですよ。皆さんそれぞれがいろいろな勉強をされていて、それが決断科学の魅力だったり、目指すものなのかなと思うんです。

花松 唯一の魅力ですね(笑)。

吉松 いやいや。それぞれが専門の勉強をされているので、いろいろなアイデアを持っておられて、それをいただけしたら私たちもうれしいです。

大学と地域のあいだで「つながる」もの

花松 紺屋さんは、ろうきん(九州労働金庫)から出向で決断科学センターの産学連携研究員をされています



紺屋美里 こんや みさと

九州労働金庫総合企画部経営企画課。
2015年10月から2017年9月まで決断科学センター産学連携研究員。

す。ろうきんとして、八女での活動を通してよかったこととはありませんか？

紺屋 前任者の企画ですけど、ろうきんの加入者です。前に企業を退職された方を対象にしたイベントを考えていました。年に一、二回、必ず支店ごとにイベントをします。日帰り旅行に行ってみたりとか、グラウンドゴルフをみんなで集まってしてみたりとか。そこで、支店がある地域ごとの加入者同士で互いの地域を紹介しあうようなバスツアーが主催できないかと。これは、「旅

する茶のくにバスツアー」の取り組みをみて、考えたことでした。

花松 ろうきんの支店は九州全域にありますよね。

紺屋 そうなんです。それでもし可能であれば、ろうきんの最寄りの支店で、八女の皆さんのお力を借りながらバスツアーをやってみるのはどうかと。例えば、第一回は熊本から来てもらって、八女に住んでいる加入者の方に何か紹介してもらおうようなバスツアーができないかと考えていました。

荒川 なるほど。それなら八女するのが一番早いよね。熊本から新幹線で久留米あたりまで来てもらえば、うちはそこからバスを出しますから。着地型プログラムもそうだけど、うちは市の職員が旅行業務取扱管理者資格を持っているし、バスもあるので、旅行会社を通さずにツアーが組めるんです。

吉松 決まったら早いですよ（笑）。

紺屋 それから、私自身も八女の実習に参加して、学ぶことができました。平成28年4月の熊本地震対応の際に、給与の振り込みやローンの返済、通帳の紛失など、

被災された方にとつて、お金に関する心配は大きいのではないかと思つたんです。そういう災害対策の面で、平成24年の九州北部豪雨で被害を受けた星野村の方にお話を聞いて、気づいたことも多かつたです。

荒川 目線が変わつてきた？

紺屋 そうですね。たとえば、避難所で自治体の方たちが罹災証明書などを出している中で、そこに金融機関もいて、住宅ローンの返済など、金融に関するこつてについて相談できるブースをつくつたらどうかとか。金融機関と自治体の災害対策の連携はすごく大事じゃないかなと考えるようになりました。

荒川 八女に来てよかつたね。自分の仕事と、地域のことを両方見れるようになったんですね。

紺屋 産学連携研究員として来てよかつたなど、いつも思いますね。支店の職員として来るとどうしても、住宅ローンどうですかとか、積み立てどうですかという話になつてしまうので、学生さんたちと地域に来ることで、いろいろな視点から物事を考えられるようになりまして。地域の方と同じ目線でしゃべれるようになりたいと

いう。金融機関の職員としてじゃなくて、一緒に学ばさせてもらうということに来ていたという点が、普通に支店で働いているだけではできなかつたと思います。

学びと地域課題解決の融合のカタチ

荒川 須藤くんにはうちで英文メールの返信を手伝つてもらつたことがありましたね。

吉松 いきなり海外からバスツアーの申込メールがものすごい数で来て・・・

荒川 福岡県の香港事務所にお問い合わせして、香港の人を対象にバスツアー参加者を募つたんです。そしたら、英語のメールが一晚で殺到して。吉松さんが「荒川さん、迷惑メールがたくさん来ていますよ」というので、「ちよつと見よう」つて見てみたら、ちよつと、これ違うよ、と。名前、年齢、住所、希望日が読めたので、これ、バスツアーの申し込みだよつて。モニターツアーなので、まずすべてのメールを読んで、審査をして、来てもらいたい人にすぐに返事をして決定通知を出さないと

いけない。

吉松 質問がある方には、それにお答えしないといけないし。

荒川 ほかの日はやららないのかぐらいはわかっただけども、だーっと書いている人は、もう全然わからない。募集要項には通訳はいましてと書いていたけれども。

花松 そこでうちの学生の須藤くんの出番でしたね。

荒川 すぐに花松先生に連絡して、そしたら須藤くんもOKだと。彼には、全部お金を払うけん、新幹線に乗ってタクシーで来ていって。とにかくすぐ来てって。

吉松 すぐ来てくれました（笑）。

花松 一日そこに座って、八女市臨時職員をやったね（笑）。彼も勉強になったと思いますよ。

荒川 あのとときは本当に助かりました。できたらこれからもお願いしたいなあ。

花松 その程度でいいのであれば、多分お手伝いできることは結構あると思いますよ。

荒川 須藤くんのメールの返信がとても丁寧書いていただいたらしくて、次に手伝ってくれた人が、「これ

は誰がつくったの？」と言うから、九大のちょっとちゃん男子の学生だよと言ったら、これはとても丁寧な英語で、多分勉強されている方やろうと。「へえー」と思いました（笑）。

花松 学生でも英語のメールのやりとりぐらいはします。ビジネス英語となるとハードルは高いですが、ある程度ならなんとか。

荒川 英語が話せたり、文章が書ける方が欲しいなとは思っています。ただ、確かに外国人のお客さんも多くなっているけれども、そのために人件費を確保するのがまだ厳しい。だから、これからも勉強のついでに学生さんに少し手伝ってもらえると本当に助かります。

花松 英語だったら会話の対応もできる学生はいます。勉強にもなりますし。でもガイドのプロではないので、そこまではというのはありますけれども。

荒川 私たち二人とも、チーフ添乗員の資格は持っているの、大丈夫。

吉松 一応、バスガイドはできるので。

荒川 だから、私が日本語でしゃべることを訳してく

れるだけでいいのよ。英語の資格ガイドは特殊で難しいと聞きました。

花松 それでよければ。逆にツアー参加者の感想を聞いてお伝えすることもできますね。

吉松 あと、英語のお手伝いとは別に、事務局のサポートーとして観光プログラムに参加していただけると、とてもうれしいですね。そのときに感じたこととか、事務局のあり方とか、お客様の様子などを後で教えていただけると、私たちはとても勉強になるので、そういうことが実現できればいいと思います。

大学と地域の理想的な付き合い方とは

花松 そろそろまとめたいと思います。3年間、実習でお世話いただいた経験の上で、地域と大学がつき合う理想的な形はどんなものだと思いますか？こういう付き合い方が本来いいのではないか、など、何かお感じになられることがあれば。

荒川 あまりガツツリやらず、こちらも当てにして

やったらいかんと思つてはいます。

花松 よくわかります。

荒川 そのくらいにしか思わないほうが絶対いいと思うんですね。学生さんも、もがきながら、将来を見越す中での一つとして八女を選んでくれているんだつたら、それでいいし。期待し過ぎて恩恵を求めたら、できるものもできなくなる。

吉松 十分いただけるものはいただいていますから。プラスがあります。

荒川 学生が来てくれるから何かしなければとかじゃなくて、まずは立ち寄ってくれて、八女でこういうことがありましたというぐらいで全然いいと思う。でも、我々行政も考えないといけないのは、来てくれている学生さんを、市の人たちにもつと何かの場で紹介しないといけないなと思います。

吉松 毎年1回、年度末に市民向け報告会をされてるじゃないですか。毎回、荒川さんと参加して思うんですね、もつと地域のいろいろな人にこれを聞いてもらいたかったな、と。もつと上の人だったり。



毎年、市内ゲストハウスで行う市民報告会

撮影 紺屋 美里

荒川 これは私の反省でもあるんです。毎年秋にやる「観光と食の内覧会」に来てもらってますよね。八女のキーパーソンや招待客200名を呼んで、八女の食と観光のお披露目をするイベントです。例えば、そういうときに「こんなことを八女でやりますよ」と紹介してもらう時間を設けるとか。顔を直接知ってもらったら、つながりもできると思いますし。

吉松 どうしたら、もっといろいろな人に聞いてもらえるのかなと思っています。内容がすごいので。

荒川 そういう機会を作らないと、いつまで経っても、「この人たち誰だろう」となってしまう。「観光と食の内覧会」は市長や市の部長級も全員来るので、いいかもしれないね。観光プログラムの方たちも皆さん来られるし、もし気になる人がいれば、そのときに名刺を渡して話をしてあげば、次は自分で行けるかもしれない。

花松 2014年に最初にご招待いただいたときに、内覧会で紹介いただいた方々が、その後どんどんつながって行って、今では知り合いも随分増えました。

吉松 先生は「もてなし人」とほとんど会っているか

ら。

花松 いや、そんなことないですよ。知っている人は増えましたが、全然ですよ。

吉松 顔当てクイズもできるでしょう？

花松 まだまだです。吉松さんがされたように、この方たちを訪ねる旅とかしてみたいんですけどね。

荒川 あのイベントで、こんなことをやってますという自己紹介から始める。いい人たちがばかりだから、誰か協力してくれる人は必ずいるよ。「なら、しゃあなかない」って。そこでコンタクトをとって。そういう、ゆるつと”がいいでしょう。

徳永 そうですね、会議になると、かしこまっちゃうので。

荒川 それが八女らしさかもしれない。いいかげんにしやるわけではないのよ（笑）。毎月1回の会議をとか、そういうのは絶対やらないほうがいい。場所によると思う。よその市町村は違うかもしれないけれども、うちの観光事業に関しては、特にそういうのは要らないかな。ただそれでも、何かうちに足跡を残してもらいたい

から、それはあなたたちの人生においての足跡にもなるし、こちらからすると、「これは実は九大の学生が来て企画したもののよ」というものができる、うれしいですね。

地域の側も学生から学ぶ

荒川 合併前の上陽町にいたときに、学生が1カ月間ぐらい田舎に来て、いろいろな農家を体験するプロジェクトをやったんです。うちにも東京の男の子の学生が来ていて、お茶畑とか梨農家とか、いろいろな回っていて、いろいろな家に泊まり歩いていきました。それで、最後の日の2日ぐらい前に、私のところに来て何で言ったかという、もう農家をやめたいと。「は？」って（笑）。

花松 帰りたくなかった？

荒川 違うんですよ。要するに、八女の人はヨソから人を招いたことがないから、言うなら朝からステーキが出るようなおもてなしで、3食すごいおいしい。まずそれを全部食べ切らないといけないというプレッシャー。

徳永 田舎のおばあちゃんちみたい。

荒川 やったことがないから。だから、あの事業は地域のの人にとっては初めての経験だったかもしれないし、そこまでしなくてもいいと学んだんですよ。結局その私たちはどうしたかというと、最後1日でいいから荒川さんの家に泊めてくれて。もう食事はいいです、あるものでと。でも、男の子だから、野菜いっぱい豚しゃぶをしてあげたのよ。地元の野菜だけで、豚肉ちょこつとで。そしたら、あれだけでも食べ物はいらんと言つてた男の子が、がながん食べて（笑）。

花松 学生は喜んで帰りましたか？

荒川 それが、夜うちに泊まりながら本音を吐いたのは、やっぱり自分も初めての体験で、農業に興味があつて大学からここに来たけど、実際は想像してたようなもんじゃないと。僕は鉄道会社に就職しますと言つて。

花松 そういうことも、ありますよね。

荒川 受け入れる側も勉強にはなるよね。だから、そういう経験を地域の人にさせるのも、学生のあり方かもしれない。おもてなしも間違えるもんね、地元の人たちは。

土中 八女の人、すぐおもてなししてくれるので、申し訳なく思うんですよ。絶対に美味しい八女茶が出てくるし。

花松 特別待遇されてるのか、これが普通なのかと。

荒川 そういうことも考えると、やっぱり「ゆるつと」でいいような気がする。

花松 なるほど。

荒川 そのためには、私たちも上手に皆さんを地域に紹介する必要がある。でも、皆さんも、私たち以外に、この人に頼めば大丈夫だろうという人を早くつかまえないと。理解してくれる行政とつき合わないと、きついかもしれないですね。その理解があるか、ないか。

花松 なかなかいませんよ。

荒川 公務員だから。

花松 荒川さんを見ると、公務員じゃないですもんね、公務員なんですけれども。いうなれば、スーパー公務員。

荒川 素性がわからないヨソモノがふらつと行くよりも、やっぱり地元の誰かにちょっと間に入ってもらおうほ

うがうまくいくよね。地元で理解してくれる人をたくさん作るのがとても大事だと思います。

今後に向けて

徳永 せっかく八女の高校で授業をさせていただったので、僕が卒業したあとともこれが上手く続いていけばいいなと思います。そのためには、大学と行政、学校がもう少しくまぐ連携していければ。たとえば、観光プランを作って実際に高校生と実践してみるとか、いろいろやり方はあるかなと思います。

花松 徳永君が1回レールを敷いてくれたので、関係さえ維持できれば、次の学生がずっと続けていけることだと思いますよ。

荒川 テーマは違うかもしれないけれども、毎年そうやって学生さんに来てもらうのはいいと思う。

吉松 高校生には、人生の大きな岐路を決める大事な時期に、すごく大きな影響を与えるんじゃないかなと思います。

徳永 逆に、市の職員の方も高校生の意見を聞くことはなかなかないじゃないですか。そういう機会は大事なんじゃないかなと思います。若者が実際に町並み保存地区を歩いたら、どういう感想が出るかとか。その辺を今回、もうちょっとうまく出せたらよかったです。

土中 個人的には、さっき言ったように、いろいろな視野が広がって、考え方もこの3年間で随分変わったので、それはすごく僕自身のためにはなったかなと思います。あとは、課題として、最後のアウトプットをどうするかというのがとても悩ましいなど。

徳永 期待されてはいないかもしれないんですけども、自分たちも何か形に残したいというのは、恩返しじゃないですけども、ちょっとあるんです。

土中 せっかく3年間通って何も出なかったというのはちょっと嫌だなと思いつつ、どうすればいいんだろうというのを考えています。

荒川 期待しちゃうね。さっき期待しないって言ったのに(笑)。



徳永 言うのやめとけばよかった(笑)。

花松 すぐには出ないにしても、そういうものを念頭に置いて、これからも頑張つてほしい。

荒川 私ももう何十年も住んで、今でもどうしていいかわからないよ。

徳永 1年、2年で何かできるというのは、おこがましいなどと本当に思います。

土中 だから、結果としてきっちり形にできるのは、もしかしたら何十年後かもしれないですけども、とりあえず今あるもの、例えば僕の視点だけでもいいから、伝えておきたいなと思っています。

荒川 土中くんは数学系だから、今までは答えをきっちり出してやってたのが、ここは全然違う世界だろうから。

土中 数学の世界はきれいなんですよ。でも、現実は、人間を介すと超複雑になる。そこを感じつつ、技術としての数学を現実の世界に応用することも研究しています。が、なかなかギャップが大きくて、オンデマンドタクシーの運用に数理技術が使えないかと思って、八女でも調査

をさせていただきましたが、人間や社会という複雑なものが絡むと、応用できないところがある。そこを解決するにはどうすればいいかということも考えられるようになったのは、よかったですねと思います。

荒川 現場を知ったということだよ。

徳永 自分もそうですね。本しか読んでこなかった人間なので、これがほんとうの生の政治なんだというものに触れられたのは、本当によかったです。

荒川 やつぱり現場を知ることだね。ということは、これからも九大の学生さんに来てもらったら、まずはいっぱい現場に行ってもらおう。

土中 そうですね。連れていってもらったほうが。

徳永 うちは頭でつかちが多いので。

荒川 そういうときには、地元で受け入れをしてくれる人がもつと増えていくと、また変わっていくのかもしれない。例えばここに来たら私たちがいるけれども、今度は上陽町に行ったら、もつと違う人がいるかもしれないし。これは大事ですよ。

徳永 確かに八女は広いので、いろいろなキーパーソン

ンを知っていたほうがいいですよ。合併したとはいいつつ、やつぱりそれぞれのまちのキーパーソンは結構いる。

荒川 だから、徳永くんも土中くんももうすぐ卒業だろうけど、既にたくさん八女の人を知ってるよね、宝物として。その人を決断科学の次の世代に紹介するのが、先輩としての仕事だと思う。あそこに行くと、あのカステラがおいしいとか、このお寺にはグラントピアノがあるとか。そうしたら、地域の人も、覚えていてくれたという事で喜んでくれるよ。

土中 そうですね。後輩に託したいですね。

荒川 そのときに、荒川さんに頼んだら大丈夫と言ってたらダメ。皆さんはわたしの子供ぐらいの年代だから、自分の子供が困っているみたいにして、なにかしらしてあげたくなるけど(笑)。でも、どんどん知ってる人を次の学生に紹介して、ネットワークを広げていったほうが、この事業は長く続くんじゃないかな。そうしないと、学生が変わっても、私はずっと同じことをしないといけない。それよりは、段階を経てお付き合いを広げて

いく、変えていくというものも、持続可能な域学連携には
大事かもしれないですね。